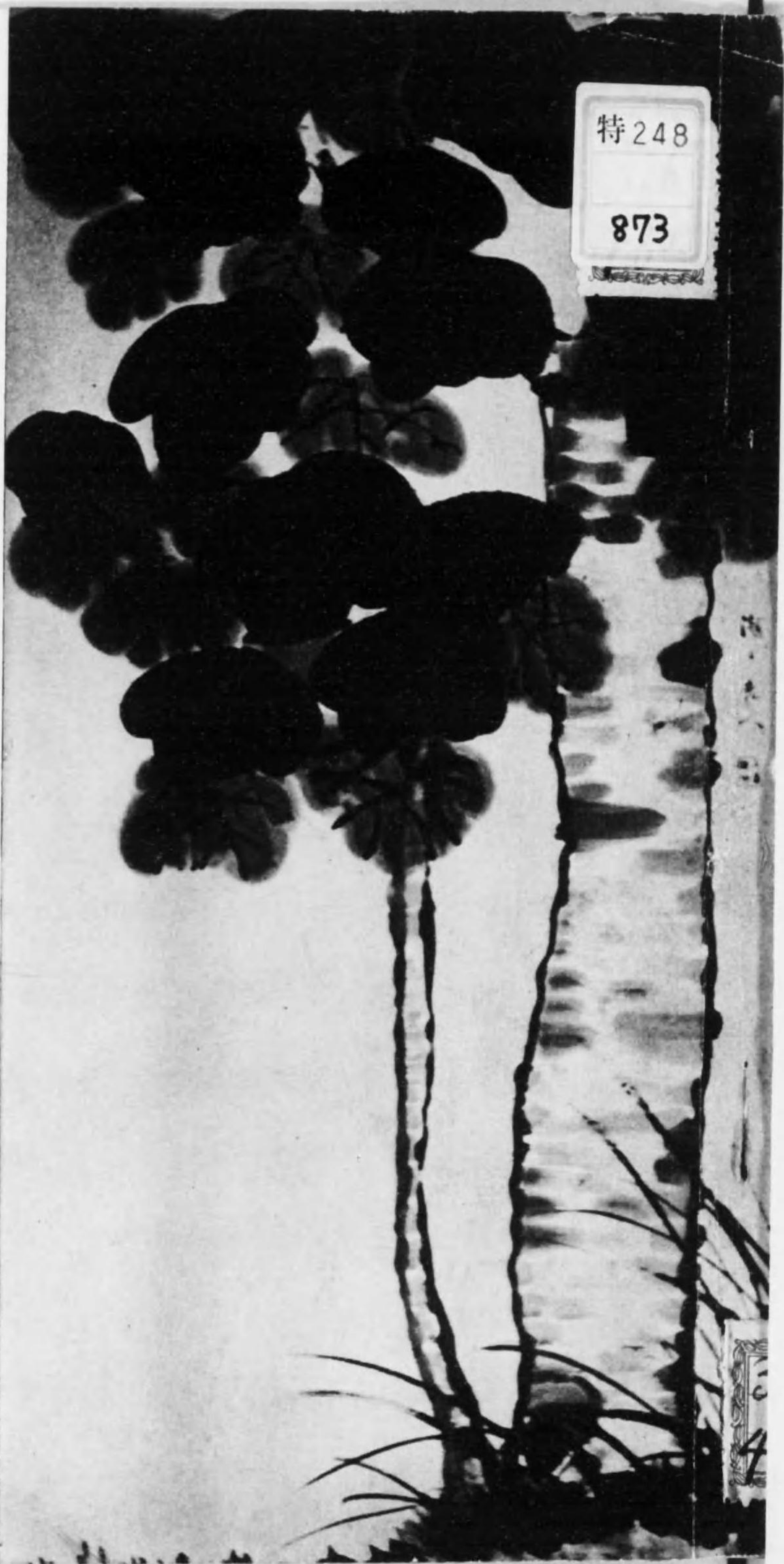


漢花集



特 248

873

始





特 248  
873

法輪  
具作居士

舞 壽

舞 強

...  
十  
已  
學  
又  
校  
台



司の後六歳未去乃今  
船・新・日・於・手  
船・新・日・於・手  
船・新・日・於・手  
船・新・日・於・手



六  
高  
新  
日  
船  
新  
日  
船



書聖中林梧竹翁略傳

中林彦四郎隆經、字は子達、梧竹はその號である。文政十年四月十九日、佐賀縣小城町に生れ、大正二年八月四日八十七歳を以て郷里三日月村莊に於て長逝、梧竹堂鳳栖五雲居士と諡した。十九歳の時、江戸に上り、山内香雪、市川米庵の門に入つて漢籍と書道を修め、三十二歳の時には藩の子弟に經書を講じた。時に支那領事館に余元眉なる書道の達人あり、一見、翁の靈腕に驚歎し、携へ來れる碑本を領事館の一室に陳列して翁の研究を助けたので、技大いに進み、之が模倣となりて翁は明治十五年渡支、李鴻章後援の下にて、當時六朝書道の權威として重きをなせる巨匠、潘存先生に師事するを得、歸朝の頃には本場支那に於て第一流の大家として優遇を受くるに至つた。後、かの有名なる北京の翰林院の額を掲ぐるに筆者を得られず、支那書家一同の推舉によつて、翁は明治三十年七十歳の時、再び支那に渡つて其額を揮毫し、非常な名聲を博したのであるが、當時篆刻の大家吳昌碩の如きは門弟數百名を擁し、李鴻章と皇族以外の印は自ら刻さぬと豪語してゐたにも拘らず、翁が北京に再遊すと聞いて、「日本梧竹」「再入燕山」の二種の印を刻して上海より北京に入り、翁に敬意を表したのは逸話になつてゐる。七十二歳の時には富士山嶺に有名な銅碑「鎮國之山」を建てた。また翁の十七帖の臨書の大幅は古今の神品と絶讃せられ、副島種臣伯は推賞措かず、翁をして之を 明治天皇に奉獻せしめ、自ら一詩を賦して翁に贈られてゐる。

梧竹先生把筆辰 從容自若坐無人 殊臨王氏十七帖 得傳風姿已達神

また連綿草の一體は、支那に於ても既に斷絶して了つた程の至難のものであるが、翁は七十八歳の時、立派な独自の連綿草を書いて、特筆すべき書道史上の功績を残してゐる。この大壁紙三十七幅の素晴らしい連綿草を始め、十二ヶ月の神品、其他凡ゆる體の傑作を遺してゐるので、翁は遂に書聖なりと尊ばれるのである。尙ほ梧竹堂書話は、支那、日本にも無い名書論として讀者の推賞措かざる翁晩年の著述であり、茲に捺したる『入唐梧竹』の印影は翁使用の一にして、鑄銅古推愛すべき遺品である。



梧竹の悟道

海老塚四郎兵衛





此論文は昭和六年七月二十五日禪學雜誌「大乘禪」の希望に依り、那須山八幡温泉に於て執筆せしものにして同誌九月號に掲載せられ、次いで駒澤大學の學長忽滑谷快天師の機關誌「達磨禪」に轉載せられしもの也。

(1)

書家でも畫家でも其生存してをつた時代に既に立派な大家であると認められ、後世になつても矢張り偉大な藝術家として重んぜられてをる僧空海や探幽、光琳の如き人物も少くはないが、池大雅の如く廣重、寫樂のやうに生存中は餘り認められず其歿後數十年乃至數百年後に至つて、はじめて非凡の書才畫才を認められ、一躍大家の列に這入つた人も可成り多いのは事實である。然るに中林梧竹の如く曠世の大書聖であり、其生存中支那に於ては勿論、日本に於ても専門家から偉大の書家として推獎せられ、明治三十年先生が七十一歳の時には支那書家一同の推舉により、北京にまで赴いて唐時代から有名な翰林院の額を揮毫し、書の本場支那で大に名聲を博し篆刻の大家であつた吳昌碩の如きは弟子を數百人も有し、皇族や李鴻章の印でなくては自から刻さぬと尊大に構へた男であつたが、梧竹翁が久し振りにて北京に來たのを知つて、自から日本梧竹、再入燕山と云ふ印を刻し、態々上海より北京にまで行き、梧竹に之を贈つて敬意を表したのは有名な話で、之により日本に梧竹ありと日本人の爲め大に氣を吐いた大家であり乍ら、歿後僅か十七八年にして殆ど梧竹と云ふ名さへ忘れられたと云ふ人も甚だ少ないと思ふ。そこに書聖梧竹の偉大さがあるのではあるまいか。貫名菘翁や日下部鳴鶴の書の様な俗書が大に歡迎せられた時代としては寧ろ當然であらねばなるまい。先日も書學院から出版せられた書道春秋にも矢張り菘翁や鳴鶴の書が俗書であるとの世評が餘程氣になると見へて、比田井天來道人なども苦しい辯護を試みてをられたのは寧ろ氣の毒な感が致しました。貫名や日下部の書が一般から昨今人氣の落ちたのは兩先生の悪い所計りを眞似る人が殖へて來たからであると天來道人は説明せられてをるが、王羲之や虞世南や弘法の書は夫こそ古へから澤山の人が眞似たり習つたりしてをるが一向に倦られず、益々其及び難き事が分つて珍重せられて行くのは何故でありませう。私を以て言はしめたなら、王羲之や弘法の書は所謂



心藝であつて、風神の高き爲めであり、貫名や鳴鶴の書は指端腕頭の藝術であつて、鍊筆の工夫はやつたが鍊心の工夫が足りなかつた爲めであると論斷したいと思ひます。

(II)

中村不折書伯や前田黙鳳道人などの創設した健筆會が明治三十九年頃、上野公園で書の展覽會を開催した時、梧竹先生の五十八九歳時代に揮毫した大幅ものが何人かの手に依つて出品せられたが、此幅がまた素晴らしい傑作であつた爲め、異彩を放つて會場を歴し先生獨りの展覽會のやうな觀があつたので早速先生に此話をした所「あれはわしが昔し書いたもので書の研究の上から論ずると極めて幼稚なものである。あんな幼稚なものが今頃一般の人に分つて來たのであらう。そうすると今書いて居るものは恐らくは百年以後でなくては一般には分るまい」と微笑せられて居りました。こう云ふ有様で先生の研究と云ふものは、其時代の大家などに比べて素晴らしく進んで居つた爲め、餘程研究を積んだ鑑賞眼の高い人でないと先生の書の味が分らなかつた。殊に精神の見方の出來ない人には梧竹の書の眞味が分らないと云ふことも先生の書が早く一般から忘れられた眞の原因でありませう。夫から先生は書を習ふのには順序があるから其順序を経ずして自分の書を習ふのは弊害を起すと云ふ見地からして決して弟子を取らなかつた。そうして書を習ひたいと云ふ者が來ると必ず支那筆一本と支那の法帖一冊を呉れたもので、私も其筆と法帖を買つた一人であります。それ故鳴鶴翁が歿後全國數千名の弟子が鳴鶴流を鼓吹した如くに、梧竹先生の書を推奨する弟子が無かつたのも其一原因だと評してをられる書家もありますが、之も廬山の一面觀で面白いと思ひますが、大體鳴鶴翁の書の研究と云ふものは孫過庭あたりを彷彿してをつた爲め、俗調であり、隨つて俗受けがしたので反して、梧竹翁の研究と云ふものは六朝隋唐は申すに及ばず殷周並に秦漢の時代にまで遡り、其源を究め百家を鑑錘し、研究また研究、遂に

梧竹の一風を興した爲めに書風高古にして容易に俗眼に入り難かつた爲めであると説かる、書家もありますが、之も廬山の一面觀として面白い見方であると思ひます。然し巖谷一六、日下部鳴鶴、中林梧竹の三人は其人格識見手腕に至つては非常な優劣があつて、明治の三筆など、云うて了ふのは甚だ當らないのでありますが、鳴鶴や一六が夫でも當時の他の書家に比して一頭地を抜いて居つたのは何人も異論のない所でありませう。只だ梧竹が餘りにも優れて居つたと云ふのが問題であつたのですが、兎にも角にも此三人が居つたので、明治の書壇は賑かであつたと思ひます。

(III)

明治二十五年頃越後へ鳴鶴、一六兩居士が招待せられて揮毫に赴いたが、其時兩先生とも一流の旅館の上等室に納まつて相當高い潤筆料を取つて大に持てはやされました。之に味を占めた世話人は、今度は名人の梧竹先生を迎へて大に儲けてやらうと考へて先生に交渉を開始した所、先生には珍しく快諾せられて新潟へ行く事になつた。然し先生の注文が中々振つて居て面白い。今度の新潟行は大に字の稽古が出来るから行く積りである。紙の上等なのを澤山用意する事、墨が附いてもよい様に白木綿の衣類と袴と襦とを用意する事を命じました。上等の紙でお手習が出来るよと云ふので大に喜んだ先生は、到着すると直ちに白装束に着更へて大いに揮毫しました。喜んだ世話人は鳴鶴翁も一六居士も一枚何圓と潤筆料を規定せられたので便利でしたから、先生にも何うか一枚何程と潤筆料を定めて欲しいと申出しました。其時先生笑つて云はるゝにはわしの書は商品で無いから正札を貼るのは嫌やだ。正札を貼らなくてはいいけないと云ふならば、今夜すぐ歸京するよ。梧竹の書が分る者は潤筆料を持つて來るだらうし、分らぬ者は持つて來まいし、そんな事は何うでもよからうとて遂に潤筆料の規定を許さなかつた所、之が又評判になつて希望者が殺到し莫大の収入が有つた。愈々歸ると云ふ晩に關係者一同を一流の旗亭に招いて大盤振舞をして、全部の収入を使ひ捨て



、了ひ、友人から金を借りて歸つたと云ふ話が傳へられて居ります。先生の書が俗離れがして居り、高古の味のあつたのも、かゝる性行の然らしめたる所でありませう。三十年近くも銀座伊勢幸の二階に住んで居つたので銀座の書聖とか書仙とか呼ばれて居つたのも有名であるが、先生にお目にかゝつて常に敬服するのは少しも大家らしい顔付や變人らしい所が無く、其日常の行ひが淡々として洒脱、寔に行雲流水の如き性格の持主で有つた事でありませう。越前永平寺の貫首で、近代稀に見る名僧と稱せられた森田悟由禪師も、常に梧竹先生を伊勢幸に訪ねて大に書法を研究せられて居つたので、私も悟由禪師には屢々先生の室でお目に懸つた事があるが、先生の人格態度が寧ろ眞の禪僧の様に見へて、禪宗の大家の悟由禪師の方が俗臭があり、面白い對照でした。そうして堂々として粉飾なき先生の態度が自然に禪師より高尚に見へたのには驚かされました。先生が書と云ふ藝術を通じて悟入せられた其心的境地は確かに古への名僧、高僧にも譲るまい。其書學上の識見高邁、悟入の境地の絶妙に非ずんば到底其晩年に見る様な立派な心藝的大藝術は生れて來ない筈である。私の此見解に疑問をもたれる御方は一度東京烏山の梧竹堂にお越なされて翁八十五歳の名品十二月の書幅を御覽になれば、如何に天衣無縫の神品であるか、お分りになる事と思ひます。一月の神前の掛物、天照皇太神の如きは翁作品中の傑作で有りまして、白衣の太神が恰かも此世に出現せられた様な有様で其神々しさに思はず頭の下る作品であります。十一月天長節の掛物、聖壽無窮の幅に至つては崇高莊重の氣韻室に漲つて明治天皇が再び此世に御出現遊されたかと驚かす、神品である事は自から親しく御覽に成つたお方は必ず首肯せらる、筈であります。『書道全集』に蘭亭の研究を發表し、書學に造詣深く鑑賞眼の卓越を以て聞えたる宮内省の書家梅園方竹居士は天照皇太神の神幅を以て古今の神品であると推獎して居ります。

(四)

夫れから梧竹先生が多年研究精進の結果悟入して後筆を執つて、書道の眞髓を説かれた梧竹堂書話は、支那、日本にも未だ嘗て無い名書論なりと梅園氏は激賞措かず、自から芝虎之門の晚翠軒主人に勧めて出版いたさせました。此梧竹堂書話は僅か十數頁の一小冊子なるも梧竹翁が卓越非凡な書學上の識見を以て書道の精髓を論述したる名著ゆゑ、斯界萬年の龜鑑であると同氏が卷末に讃辭を呈してをるのも過賞ではないのであります。然し先生晩年の書には心藝の所産が多く生れて傑作が澤山ある事は知つてをらるゝが、畫に立派な藝術品のある事を知る方が少ない様であります。然し先生の畫については、其當時の南畫の大家が口を極めて絶賞して居られます位ゆゑ、實に立派な作品が有ります。八十五歳の八月頃、富士山嶺に立てた銅碑「鎮國之山」の事を思ひ出し、わしももう一度富士山へ登つて見たいと云はれ、二間に一間半の紙を展べて其中央に雄大な富士山をかきました。此不二山は非常な傑作でありまして一線一劃が悉く飛動してをり、山の姿が常に變化して見へる位でしたが隅の方に細長い蓮峰山人の印が一つ捺されて有つた計りで餘白の澤山あつた作品であります。此餘白を充分に活した所に先生の大藝術が存するのですが、先生には畫の分らぬ人が、此餘白へ贊でも書いては困ると考へたものでありませう。わしの死後此餘白へ贊など絶對にやらぬ様遺言をして置いて貰ひたいと申されましたが、惜しい事に此名畫は大震災の時焼失して了ひました。此餘白を活かす所に東洋藝術の生命があると論じてをる方もありますが、當時先生の畫には贊が無いから駄目だと論じてをつた方々が尠からずあつたのには一驚を喫しました。尤も先生が畫をかいて居られて詩興が湧き詩が生れた時には双幅になるやう別の紙に詩を書いて居らるゝのを能く見る事が有ります。然し先生は潘存や余元眉などの紹介にて支那の學者や詩人や名士と多年交際をして居られた關係上、詩と云ふものに對する鑑賞力が卓越して居つた爲め日本人の詩と云ふものは、何うも面白くない。詩は矢張り本場だけに支那人の方が上手だ。支那も唐時代の詩、それも高僧名僧の詩には名吟が多く風格も高く含蓄が深いと云はれて、唐代名僧の詩や、晉代學者の詩を好んで揮毫されました。



日本人の詩としては私の知つてをる範圍では菅原道真公の詩を書かれたものが一幅あるだけで自分の詩なども滅多に人に示される事は無いのでありますが、洋書家の小寺健吉氏は先生自作の詩を十七八幅所蔵せられてをるので親しく見ましたが、極めて平易の文字を使つて銀座街頭俗悪平凡な都會生活を詩的化して仙人境を髣髴せしめてをるのには敬服させられました。徒らに難解の文字を羅列して、以て博學を衒ひ、吟じて見ても何の響も感じも出で、來ない様な詩を作つて自から詩人がるのとは比す可らざるものであります。尤も先生は性來、藝術家としての素質に恵まれてをられ詩人としても立派な性格な持主であつた故でもありません。唐代の名僧や晉代の學者の詩を書いた先生の書幅の前に立つと實に名大家の書いた南畫に接してをる以上の興味の湧いて來るのには只々頭の下がる計りでありませう。書は心畫なりと云ふ議論は先生の如き心藝的書に依つて初めて如實に立證せられるのではありますまいか。先生が武家出身の故でも有りましてせうが、名刀が殊の外好きで澤山の刀劍を蒐集して其銘を習うてをられたのは有名な話ではありますが、八十五歳の老翁で有りながら散歩の時は常に半紙と鉛筆を懐にして我々が見てはつまらぬと思ふ神社の額などを寫し取つて居られました。或時其理由を訊ねました所、先生には素人のやたら書の中になか／＼面白い字があるから寫すので、また名刀を打つ位の名人には立派な魂がこもつて居るから其魂を寫し取るのであると説明せられましたので初めて名人になる位の大家の工夫着眼と云ふものは非凡であると悟りました。天下の名人が八十五歳の老境にあつて此精進あり而して後に書聖と謳はれるのでありませう。今の書家先生が五十や六十で早くも老大家を氣取り、書の研究はそつち退けにして書道雜誌の出版に狂奔し、或は拙劣見るに堪へざる手本を亂發して金儲に汲々たるは、藝術の墮落であると評してをらるゝ方が有りますが、確かに頂門の一針で有りませう。

(五)

先生の美點は容易に人の書を貶さぬ事でありましたが、若し眞剣な態度で書評を求めますと學人を誤つてはならぬと云ふ親切心から實に簡にして要を得た批評を致されました。先生が横濱の父の隠宅であつた朝爽夕佳亭に永らく滞在せられて居つた時、市の有力者が貫名と山陽の書を携へて先生に書評を求めました。其時先生には山陽も貫名もまだお師匠さんが附いてをるからねと簡単に教へられました。此二人はまだ古人の眞似をして居つて自分の書と云ふものが出来てゐないと云ふ意味であります。實に簡単にして要領を得た書評と云ふ可きであります。

先生が嘗て山形縣南村山郡堀田村の寶泉寺の住職で後に江州醒ヶ井の時宗大本山蓮華寺の貫主となつた佐原隆應上人に招待せられて行つた折上人の懇望に依り金谷堂之古跡と云ふ大きな碑を揮毫されましたが、近來稀に見る高古にして雄渾の文字であります。此時上人の爲めに一卷の片假名をも揮毫せられました。此一卷は上人の書道の弟子であつた歌人の齋藤茂吉博士が上人臨終の折遺品として贈られたので、今も大切に珍藏せられてをります。得難き書道の参考品故、近く印刷に附して烏山の梧竹堂に寄贈せらるゝ約束で有ります。博士は熱心な書道の研究家故展覽會毎に來觀せられ忙中閑を偷んで先生の書を大半臨摹せられました。梧竹翁崇拜の點では人後に落ちない方で有ります。夫から角田孤峰、花房雲山、榊原鐵硯、宮嶋大八、千葉胤明、杉山令吉、下村爲山の諸氏の如く、只書の技巧計りでなく精神的見方の出來る宗教家や畫家や歌人などの研究家が展覽會毎に殖へて行くと云ふ事は先生の爲にも又書道向上の爲にも悦しい事でありませう。

寔に先生の書の如きは奔放自由にして圓融無碍。奇を求めずして自から奇、古を求ずして自から古、百家の法を學んで百家の法を脱し、正よりして奇に入り奇を出で、正に歸し、遂に梧竹の一家を大成し、心手相應の妙技を休得し書藝を通じて天地の大道に悟入した大書聖であると云ふも溢美ではありませぬ。禪を學んで正法眼を得ざる者、之を野狐禪と云ひ、古人の筆意を得る能はずして放肆怪奇、高く自から標榜する者は書中の野狐禪であると書論中に喝破



せる先生は、真に書中の大禪師、大知識と云へるのではありませんまいか。(終)

書の鑑賞に就いて

海老塚四郎兵衛



此論文は、昭和十年四月二十日雑誌「日本趣味」の懇望に依り執筆せしもの也。

(一)

書聖梧竹翁の第十四回遺墨展は、法書會主催の下に私の所藏品千餘點中より傑作のみを厳選し、来る六月八日より一週間、上野の府美術館で開催する事になりました。これは、勤務や營業上の都合で、郊外の梧竹堂まで容易にお越しに成り得ない方々のお便宜の爲にもと考へた企であります。元來府の美術館の様な會場では奨励的な意味を持つ展覽會には至極妙でありませうが、藝術を靜かに鑑賞すると云ふ様なものには甚だ不適當な場所であります。殊に梧竹先生の書の様な藝術的香りの高い作品を、あ、云ふ人出入の頻繁にして落付のない會場にて鑑賞すると云ふのは、決して策の得たるものではないと私は考へて居りますが、中には私邸で遠慮しながら見るよりも呑氣でよいと申される方も有ります。そう云ふ人には、頗る便利であらうと思ひます。尤も今回展覧する書幅の中にて「蕪蕙」と云ふ二字の大幅は、最初から千人以上這入り得る大講堂に掲げる目的を以て揮毫をせられたもの故、遠くより眺めても、どつしり落付いて見へる様千鈞の重味を持たせて書いてありますから、恐らくはあの大會場に掲げても堂々として會場を壓し得るものと考へて居りますが、大壁紙半切の長條幅は支那風か西洋風の應接室に、其他は何れも皆日本座敷に於て眺めるやう書かれて有りますから、是非共一幅か二幅床の間か應接室に掛け、其幅に相應した花でも活け、香を焚いて緩々、鑑賞をしないと藝術書の鑑賞にはならないのであります。殊に先生晩年の代表的作品には、其書いてある所の文句に依つて、各異つた光りが現はれ、其掲げてある室を實に能く支配しますので、幅に依りては他の文字と云ふものは額でも外さねばならぬ事になつてをるのであります。つまり異つた文句の幅や、額を一室の中に置くと互に異つた光りと光りで複雑なものが室内に漲り、それが禍ひとなつて、充分其幅が持つ所の味を鑑賞する事が出来得ないからであります。尤も、香も光りも何もない非藝術的な書ならば、何百幅一堂に並べて鑑賞しても、少しもそん



な心配は無いのでありますが、其代りそんな書になると臭氣紛々、近より難く、会場を一巡すると頭痛がして来ると云ふ代物であります。然るに最近長足の進歩を來たした我が日本の書道展が、一般の鑑賞家から相變らず不評判なのは、甚だ遺憾とする所でありますが、本來藝術と云ふものは、云ふ場所で展観せしめ、賞牌などを附與し、名譽心や虚榮心を煽ると云ふのが、そも／＼間違つてをると論じてをる方が多いのであります。其上鑑賞眼の低い審査員に依つて厳選せられた書などに良いものが無いのが當然であると慨嘆してをる人の多いのも事實であります。寔に之は正論であります。鑑賞眼の低いと云ふ事は何も書道展の審査員計りと限つた譯では無く、一般に書の鑑賞と云ふ事は非常に難しいもので、優れた鑑賞家と云ふものは曉天の星よりも稀であります。

(二)

古法帖の蒐集家として、又一般からも優れた鑑賞家のやうに信じられてをる某畫伯の如きは、多年書聖王羲之の書を俗書なりと無批判に貶して居つたので有りますが、たゞ／＼支那甘肅省の敦煌から前漢時代の肉筆が出土した所、其中に王羲之の書と類似のものを發見するや、遽かに羲之崇拜家となり、王羲之の書は前漢時代の書に似てをるから俗書ではあるまいと主張し出したのは、滑稽な事柄として、今も猶ほ書家仲間の一話となつて居ります。此人の如きは眞に書の雅俗を見分ける眼なく、只何でも秦漢時代か殷周時代の古い物でなくては、古雅では無いと盲信する鑑賞家の一例であります。

また或る有名な少壯學者で、詩も作れば書の歴史にも明るく、常に多くの名士へ書を教へて居る方がありますが、其平素推奨して居る書が甚だ低級のもの計りで問題にならないにも拘らず、王羲之の十七帖や蘭亭を口を極めて賞讃するので不思議に思うて調べた所、此人は文章が能く讀めるため、十七帖や蘭亭を絶賞する支那人の文章に心酔し、

其受け賣りをして居ると云ふ事が分つたのであります。書學に明るい學者と云ふ者が、必しも鑑賞家でないと云ふ一例であります。一寸詩を作つたり、書の歴史的説明が上手であると、直ぐ其鑑賞眼も偉いものとして祭り上げて了ふのは、滑稽であり、馬鹿氣た事でもあります。

夫から我が書道界に多大の功績があり、門弟や孫弟子の多い鳴鶴翁の書を俗書であると評するのは、甚だ怪しからぬと云ふやうな議論が昨今存りに或一部で論ぜられてをる様ですが、一體功績の有つた事と、書の俗であると云ふ事とは自から別物でなければなりません。書道に功績あり、書界に勢力のある人の書なるが故に、俗書であつても俗書で無いと論するのは、徒らに書を學ぶ者を誤るもので、所謂曲學阿世の愚論であり、夫こそ怪しからぬ議論であります。こんな愚論が書道界の一隅に今尙其存在を許されて居ると云ふ一事を見ても、我書道界一般の鑑賞眼が甚だ幼稚である證據ではありますまいか。

(三)

能く世間では書畫の蒐集家が卓越せる鑑賞眼を有して居る様に考へてをらるので有りますが、之も多くの場合間違つた觀察でありまして、却つて色々雑多の書の蒐集家には、眞の鑑賞眼のある人が少ないもので有ります。

或好事家で金と閑のあるまゝに、日本の名ある人の書は申迄もなく、支那近代の書は殆ど各時代を通じて餘す所なく蒐集し、其數の夥しき點に於ては、容易に他の追従を許さぬので有りますが、其鑑賞眼の甚だ幼稚なのは、いつも苦笑を禁じ得ないので有ります。畢竟、かゝる人は淺く博く見て居るので、何を聞いても知ては居るが、其鑑賞眼に至つては、勢ひ淺薄となるを免かれ得ないのであります。蒐集家必しも鑑賞眼の勝れて居らぬと云ふ一例であります。



然らば、書家と云ふものが、鑑賞眼が勝れて居るかと云へば決して勝れて居らず、寧ろ反對に甚だ幼稚である事を知らねばなりません。一六翁や鳴鶴翁の書にしても、俗書であるなど、貶しては居りますが、兎にも角にも、近代の上手であり書の研究に至つては苦心努力して居りますから、普通の人が十年や十五年字を習つた所が容易に追付き得るもので無い所から大抵の人が書を習ふと先づ一六や鳴鶴に頭を下げて了ふ。それから趙子昂や黄山谷に傾倒し、更に又、顏真卿や虞世南に跪き、最後に懷素や王羲之、王獻之に低頭すると云ふ有様で、斯く多くの大家に頭を下げてをる間に、三四十年は夢の如くに過ぎ去るのであります。而して書家と云ふものも或一定の所まで行くと進歩が止まりそこより抜出して達人の域に到るものは實に僅少の人であります。それ故少し自分より上手な書に接すると、直ぐ其書に吞まれて了ふ結果鑑賞眼が向上しない爲め書に對して技巧以上の鑑賞が出来得なくなり、従つて技巧を超越した精神的なものになると一向分らぬ書家の多いのは已むを得ない事でもあります。其代り専門の書家にして卓越した鑑賞眼を有する人になると、それは全く素晴らしいもので、眞に驚歎に値するもので有りますが、梧竹先生の如きは確かに其代表的の一人であります。

先生は平素自分の書は今後百年以上を経ないとなか／＼眞價を認められまいと能く云うて居られたので、或日其理由を訊ねた所「わしと同じ位に書のかける者が生れて来ないと自分の苦心は分つて呉れないからなあ」と云はれて居りましたが、之は寔に至言であると同時に如何に書の鑑賞が難しいものであるかと云ふ事が分るのであります。

(四)

然らば如何にして書の鑑賞力を養ふ可きかと云ふ問題になると、色々の意見が出ませうが、私の経験から申し上げますと何よりも第一に書の名品のみを常に鑑賞し、非藝術的な書を決して見ないと云ふ事が上策だと考へて居ります。聞

く所に依りますと、本阿彌家で門弟に刀劍の鑑定を仕込むには最初は眞正の名刀のみを見せて置いて決して贋物や鈍刀を見せない。それで眼を養うて置いて、偶々贋物を見せると直ぐ見分けが付くと云ふ事ですが、書も又之と同じで常に立派な作品を見てをると眼が非常に肥えて来る結果、非藝術的俗悪の書に接するとすぐ其書品が分るもので有ります。前年私の友人で書の稽古を多年或有名な書家の通信教授でやつて居り、地方の支部長なども勤めて居つたが、一向書に對する眼が開いて居ないので一つ試みに書眼をあけて見ようと考へて、其話をした所大に喜んだので早速梧竹翁の五体法書を貸してやり、半ケ年間は此肉筆法帖と支那の唐代名家の拓本以外絶體他の書を見ない事にいたしました。所が其効果は素晴らしい力で現はれ、今迄習つて居つた自分の書が見るに堪へられなくなつたのは云ふ迄もなく、神の如く尊んで居つた一六、鳴鶴の書なども皆習ふ氣になれなくなつた結果、書を習ふ方針が分らなくなり、一同打揃うて上京し、私の所へ相談にやつて参りました。そこで歐陽詢の九成宮の拓本を求めさせ、書法に詳しい宮内省の書家梅園方竹氏に添削を乞ふ事に致させたのでありますが、僅か半歳の間に書の鑑賞力をかくまで向上し得たと云ふ事は、書を學ぶ人に取つて非常な参考であると考へてをります。されば鑑賞眼を高めんと希望せらるゝお方は常に古厚逸宕にして、氣韻の高き名幅法帖を座右に備へて、絶えず其神韻に接して居ると云ふ事が無二の秘訣であります。

(五)

以上述べ來つた事柄によりまして書の鑑賞と云ふものが非常に難しいものである事がお分りになつた事と思ひます。私の如きは書の鑑賞と云ふ事は一つの立派な藝術でさへあると考へて居るものであります。それは我々が立派な書の名品に接した時には、其筆者の藝術的境地と全く同じ境地に逍遙し得るに足るだけの藝術的教養と云ふものが無



くは眞に其名品の藝術を味ふ事が不可能だからであります。世に云ふ俗物だと云はれる男には藝術的高雅な書や畫が分らぬと云ふのも、つまりそう云ふ男には藝術的教養が無い爲めであります。

然しそう云ふ俗物でも教導する人が有つて常に名書畫を見せて藝術的教養を涵養せしむると追々高尚の書が分つて来るやうに成ると云ふのも一面から云ふと書畫の持つ感化力で、そこに書や畫の名品が世に重んぜらるる所以でもあります。又そう云ふ一種無限の感化力を持つ書や畫でない神品とか名品とか云はれて尊ばれないものではありません。それ故苟くも書の鑑賞家と云はれる者は少くとも筆工的な見方計りでなく字外の韻を見得るだけの眼力あるを必要とするのであります。

梧竹先生は王右軍の蘭亭を評して結構の妙云ふ可らずと雖も、字外の韻に乏しいと論評を下して居りますが、古今神品と稱されてをる蘭亭に對して斯かる鑑賞眼を備へてをる人が果して幾人ありませうか、鑑賞の頗る困難である證據でありませう。夫から若し書聖梧竹の書の眞價を知らんと御希望のお方は是非共まづ晉の王羲之、王献之及び我が弘法の筆蹟を充分研究會得して後に梧竹の書を検討せねばなりません。實に書聖梧竹は此三人の妙蹟を八十餘年の永きに互つて最も深く又最も藝術的に研究會得し盡して後、梧竹の一家風を起し書の藝術に一生面を拓いた弘法以後の第一人者なるが故であります。而して書聖梧竹の大藝術が分つたお方は更に其向上せる鑑賞眼識を以て王羲之、王献之、弘法三書聖の筆蹟を改めて鑑賞する事を私はお勧めしたいと思ひます。其時恐く皆様には王羲之、王献之、弘法、梧竹の此四人は共に同一線上に立つてをる古今の大名手なる事を發見せらるゝであらうと確信して居ります。(終)

## 書聖梧竹の臨書に就いて

海老塚四郎兵衛



此論文は昭和十一年五月二十八日泰東書道院の機關雜誌  
「書道」の懇望に依り執筆せしものなるが、同年七月同誌  
古今臨書録に掲載せられしもの也。

(一)

私の家は鎌倉時代から横濱土着の百姓であるが、近くに永田の寶林寺と云ふ天下の禪林があつて、鎌倉圓覺寺中興の名僧と云はれた誠拙禪師や、蘇山、妙機など、云ふ大知識が法を説かれて居られたので、代々總領は必ず此寺に行つて坐禪辨道をやる家憲になつて居つた爲め、亡父量正居士は禪海、一瀾の著者として有名な傑僧今北洪川和尚に師事し、本牧の三溪園原富太郎氏の先代と二人で圓覺寺別院を建立した關係から、釋宗演、宮路宗海、古川堯道、太田晦巖、峰尾大休など云ふ圓覺寺派の禪師が絶へず遊びに見へて居つた因縁から、父も自然禪僧の書畫を好む様になり、白隠、遠翁、夢窓、仙崖、妙機、蘇山などの優れた物を多く持つて居つた爲め私の如きも書と云ふものに少年時代から執着を覚え、二十五歳頃には相當書に對する眼があいて來てをつたが、宮内省の梅園方竹氏の所へ梧竹や禪僧の書を擔ぎ込んで眞劍に研究をやり始めたのが大正五六年頃で今から二十年程前である。私は直觀の上から、梅園氏は書法の上から逢ふ度毎に大に議論を戦はした結果、お互に得る所が多かつたのは事實であるが、私のは精神的の觀方であり、梅園氏のは書法上の觀方であるから、永い間議論が今日の様に一致する事が出来得なかつた。氏は人も知る松田南溪翁の高弟であるが、南溪翁は書のお悟りが出来得なかつた結果、晩年あんな邪道に陥込んで了つたのは氣の毒だが、氏は眞宗興正寺派の門地高き寺方の出だけあつて修養底がある爲め、書の上にも梅園流のお悟りがあるから、師匠の轍を踏んで邪道に陥らなかつたのは偉いと思ふ。書藝五月號に松田南溪翁の書幅が出てをるが、其幅を御覽になると書のお悟りと云ふものが如何に書道上大切であるかお判りに成ると思ふ。此幅こそは南溪翁が迷ひに迷つて邪道に陥入つた晩年の代表的作品の一つである。雜誌と云ふものは良い物計りを載せず、こう云ふ悪作も載せて學書者の參考に供するの勿論悪くはないが、出來得るなら同じ筆者の出來の良い物を一緒に並べて出して貰ひたいもの



である。さうすれば書を學ぶ上に一大参考になると思ふ。南溪翁の細楷などには却、良いものがあると私は記憶して居る。然し梅園氏は微細な研究の一方面を南溪翁より受け續いたが、南溪翁と異り精神的方面の發達した人であり、古書を能く調べて研究心の旺盛な人であつた所から、私の直感的質問が支那の古い書論にあるのを發見するや、遽かに私の説に耳を傾ける様になり、烏山の梧竹展には毎回一二度は必ず見へて鑑賞し、研究を續けてをるのは敬服す可き事と云はねばならぬ。之が修養底も無い、古書なども讀めない、學力の無い書工になると、お素人の錯覺であるなど一笑に附して了ふのであるが、私の如き素人の説をも傾聴して研究した結果、昨今鑑賞上に非常な進歩を示して來られたのは、氏が修養底あり學問底あり、其上書道に精進をせらるゝ賜であると云ふも過言ではあるまい。此三つの中一でも缺けたならば、書藝は向上するもので無いと私は信じて疑はないのである。然し梅園氏は六十一歳である。梧竹先生の六十代の書と云ふものは、晩年八十五歳の書に比べると師匠と弟子との差があるから、氏も今後二十年間今日の如き精進を續けられたなら相當見られる作品が生れて來るであらうと信じてをる。鑑賞家から見ても現代の書家先生が五十や六十で大家を氣取るのは寧ろ滑稽である。

(二)

兎に角藝術に成ると、獨り書計りでなく、能の如きも非常に難しいもので、絶世の美人と云はれた小野小町が年老いてから幽霊となつて現れ出て來る楡垣と云ふものは、三老女物と云はれて時の名人が六十歳以上でなくてはやれない許ものであるが、何故そんなに難しいかと云ふに、老婆とは云へ絶世の美人ゆゑ女としての美しさが無ければならぬ。老婆の枯れた所を出そうと思ふと美人の美しさが出て來ない、美人の美しさを出さうとすると、老婆の枯れた所が出て來ないので至難とされてをる能である。表枯れて中に美しさのある漢魏六朝の文字は、實に此楡垣の能の氣

分でなくては臨摹が出来ないと梧竹先生は常に云うてをられたが、先生の漢代鏡の銘の臨書を見ると實に能く此趣が現れてをり、敬服の外は無いが、矢張り秦漢六朝の臨書の上々のものになると書聖梧竹翁の手腕を以てしても七十代以上のものでないと面白くないのである。名人にして尙且つ然り、達人にも達しない上手に漸く手の届くか届かぬかの腕の人が六朝ものなどやつても能く出來得ないのが當り前で、鑑賞家から見ると全く見るに堪へぬと云ふのが正直な告白であらう。

鳴鶴翁の門弟で楷書は師の鳴鶴と並び稱せらるゝ位達者と云はれた稻垣師竹の鄭文公碑の臨書を見たが、其容易ならざる努力に對しては敬服の外はないが、此人は一向藝術の分つてをらぬのは惜しいと思ふ。元來鄭義の碑の如き豪宕雄偉、然かも悠揚迫らざる文字の姿を寫し出すには、紙と文字との大きさの釣合、文字と文字との間隔と云ふ事が第一に肝要である。梧竹先生は實に此點に於て甚大な注意と用意を成されてをるのに、師竹は此重要な點を全然無視閣却したのは臨摹の資格が無いと云ふ可きであらう。私は平素能舞臺に於ける橋がかりのあの數間に互る長さに就いて敬服してをる一人であるが、あの橋がかりは出て來る時は能の位をまづ示す大切な場所であり、終つて引込む時は弓術で云ふと殘心を見せるに大切な場所である。殊にあの大きな能衣裳を着けて三四人出て來て舞ふ場合には、あの位の長さが無いとあの能の靜かなゆつたりした氣分が出ないのである。十年計り以前に新聞社の講堂で催された能を見た所、會場の都合で此橋がかりが、半分位の長さに短縮せられた結果、三人も立並んで舞うた場合、袖と袖とが觸れ合ふ爲め、せまこましい感に打たれて譁のゆつたりした閑寂な氣分がすつかり打壞されて了つたのには全く呆れて興味が半減せられた爲め、其後は本格的舞臺以外の能は絶対に見ない事にしたのである。眞に藝術と云ふものが分ると不愉快で到底見てをられないものである。師竹の臨書がこう云ふ簡單な點に失敗をして居る様ではお話にならない。夫から一畫面の中に同じ様な變化の無い打込を煩しい迄に見せられては、其打込が如何に鳴鶴流獨特のもので



あつても、鼻に付いて何うにも助からない。波磔の如きも千遍一律でこつい鳴鶴流獨特の品位に乏しいものをあ、澤山並べられては不愉快である。梧竹先生の如きはさんずぬも無限に變化を示して同じ畫面には勿論、一堂の書幅中にも同じさんずぬを見出す事が困難であり、打込なども千差萬別で變化自在、波磔の如きも變轉極りないから、見れば見る程妙味を感じるのには臨書として大いに参考とす可き事であらうと思ふ。

(三)

夫から河井荃廬老御自慢の吳讓之の書譜の臨書が書藝五月號の巻頭に出て、をるのを見たが、筆勢鈍重もたゞしつてをて筆に少しの冴えも見出せないのは氣の毒である。此吳讓之は法帖に對するお悟りが無い人と見へて、書譜のよい所がすっかり隠れて其悪い點計りが表現せられて居るのは、臨書として一種の参考品であらう。尤も荃廬老は本職が書家では無く篆刻家故、肉筆の方まで眼の届かないのは無理もない事と思ふが、現代日本の書道界は過渡期のせい、少し世間的に名のある人が賞め上げると其實質を充分検討せずして雷同する傾向が多いが、之は書道向上の爲めに改良す可き點である。

云ふ迄もなく法帖碑本は古書の眞では無く、古書の眞を求むる爲めに必要のものであるから其考を以て臨書をやらぬと、かう云ふ失敗を招くのは獨り吳讓之計りではない。元來大した腕の持主でない吳讓之が書譜の様な餘り勝れて居らない法帖をお悟りが無くして只其形骸を餘りに忠實に寫さうとするから筆勢が全く死んで見られないものに成り終つたのである。

肅府本の淳化閣帖の様に、法帖としては上の部に屬するものを繕いて見ても其姿と云ひ、風韻と云ひ、運筆の勝れて惚れ／＼する様なものは實に僅かである。刻の又刻の又刻が多いから餘程本體から崩れて來て居る爲めであらう。

それ故私は平素出來得る限り法帖を見ない事にして、必要の時だけ充分に見る習慣をつけた爲めに、今日では法帖を見ればすぐ其善惡眞僞が分る様に成つて、多くの大家が陥り易い碑碣法帖病にならなかつたのは幸福であると考へてをる。之は全く諺の稽古からヒントを得た賜である。

私は嘗て梅若萬三郎氏など、自宅の舞臺で一所に稽古をして鼓の非常に上手であつた飯塚氏と其子息の丸山文之助氏から、毎日六時間以上の稽古をうけた所、今迄お素人が餘りやらない稽古法を私に試みようと思ふので、飯塚氏は小鼓を打ち丸山氏は太鼓の間を取り、私は自から打板を打つて最初はノリ地を、次にクセを、凡そ一ケ年計りやつた所、キリヤクセの調子がすっかり染め付けられた結果、手に這入つて、小鼓や太鼓があつても無くても拍子がすつかり這入つた諺が出来るやうに成つたので、拍子のないお素人の諺を聞くのが不愉快に成つて了つた。其頃友人の有名な辨護士を訪問した所、此辨護士は一流の大家に就いて二十五年以上も稽古を積まれて居つたので、熊坂の同吟をやつた折柄、風邪で寝てをられた令嬢が小鼓を抱へて二階の客間にやつて來られて云ふには、寢乍ら貴方の諺の間を取つて見たら鼓が打てますから、打たして貰ひたいと云ふ事になつて、打つて貰つたが令嬢の曰く、父は二十餘年も稽古をやつて居りました上手だが、拍子なしの諺ですから鼓が打てないので困ると云はれたので、私は大いに悟る所が有つたのである。尤も自宅で復習を決してやらす必ず兩氏の前でやつた爲め、勝手氣儘の諺にならず、お素人には比較的困難な拍子と云ふものを早く手に入れる事の出來得た經驗から、夫を書の上に應用して見たのである。意臨に於て古今に卓越した手腕を有し、古法帖の誤りを訂して藝術的に之を臨摹した梧竹先生の幅計りを見て居つたので、自然と法帖碑本の眞僞や誤謬を一眼で見得る様に成つて了つたものである。それ故法帖と云ふものを自分の手許に引寄せて之を藝術的に意臨し、洗煉せられた藝術的作品と化してをる先生の幅を見馴れた眼を以て、孫過庭の書譜の如きものを見ると羲之の良い形の文字の拾ひ集めの様なものであり、度々の複製もので字の形も崩れ布置法なども、めち



や／＼故、餘りよい感じのものではない。それ故吳讓之より腕の勝れた人が臨摹しても書の上にお悟りが無い人がやると必ず墨猪死蛇と化したるのである。

(四)

一體臨と云ふものは形臨は勿論だが、意臨にしても多少捉れるもの故、餘程卓絶した腕前の人にして、書のお悟りを得た人でないと法帖より立勝つたものは出来ないものである故か、臨書ものでは中々よいものが見當らないのである。それ故原本に立勝つて見へる梧竹先生の八十五歳筆の王羲之の朱處仁帖や淳化閣帖にある省飛白の臨の如きは意臨として古今の作品であると云ふも決して溢美の言ではあるまい。殊に先生の古文の臨摹になると、寔に最高藝術品と云ふ感があるのである。固より獸骨や鐘鼎彝器に刻してあるものを毛筆で以て其拓本通りに眞似て見せて喜ぶのは不可能であり、又實に愚の骨頂である。先生の如く意臨で以てすつかりあの古文を我ものとなし、藝術的に之を表現してこそ藝術的價值が生ずるのではあるまいか。其線條の輕妙洒脫、枯れ切つた線の中から滲み出て来る神能ものみに見へるあの神さびた美しさ。餘白に溢れ出て来る商周の古調、肉筆としては支那に於ても容易に見られない藝術的作品である。

セルバン五月號に津田青楓書伯が梧竹の書と云ふ隨筆ものを書いて居るが、書家だけに面白い見方をしてをる。「梧竹堂に行つて梧竹先生の書を見た所餘り色々の書体が有り、さうして各々それ自体に成り切つて居るので何れが眞の梧竹だらうと自問が起つて来る位だが、然し色々の書風があつて幾らあつても見飽がする事は無つた。例へば各々個性の異つた數人の寄り合つた畫の展覽會を見てゐる様でバライテイはある」と論じてをる。一休書と云ふものは畢竟線藝術である。梧竹先生位に線が自由自在に書きこなし得れば何を書いても立派なものが生れて来る譯である。草や

行は書いても篆隸は書けないとか、楷や隸は書いても、草篆や八分は出来ないとか云ふのでは、線の研究が未熟な故である。如何なるものでも書きこなし得る様線の練磨の出来てゐない人は書家になる要素の無い人と云ふ可きであらう。古文や篆隸楷行草八分、何を書いてもびつたり其物に成り切つて見へるのは先生の線の研究が古今に卓越してをる證據である。さうして具眼の士が見ると何を書いても盡く梧竹其人の心の姿が實に能く現れて居るから面白い。踊の名人六代目菊五郎の娘道成寺や鏡獅子、三番叟や藤娘、どの踊を見ても變化自在其物に成り切つてをるから面白くて見飽の仕ないと云ふ定評である。全く個性の異つた數人の者が踊つて居る感があるが、踊の分つた人が見ると其何れの踊にも菊五郎其の人の個性がはつきり現れてをると云はれてゐる。踊の技法が上手な爲めに菊五郎の本体が其影に隠れて了つてをると見る人があるならば其人は踊の見方の分らないお素人評である。梧竹先生の本体と云ふものが技法が素晴らしい爲めに、其技法の影に隠れて了つたと論じてをる書伯は、書の方は矢張餘技故其鑑賞眼の未到なのは無理からぬ事である。書伯が此様に梧竹の本体を捜し出すのに面喰はされた位、先生は技法に於て古今に勝れた人と成られたのは若い三四十代に非常な努力精進を以て、あらゆる法帖の形臨をやり、日本に在つた物は盡く書に關する限り習ひ盡して習ふものが無くなり、遂には支那の古錢を求めて臨摹したと傳へられてをる。其後は形臨を全く廢して早くも意臨に移つた爲め五十歳前後に書いた千字文がすつかり梧竹の千字文に成つてをるのは偉いと思ふ。此時代に於て既に梧竹獨特の立派な線が生れて一家を成し、法帖の觀方に大見識が出来てきた以上、我々が見てさへ誤りが多くて感服の出来る法帖の少ないものを精根を打込んで形臨するのは益のない事で又必要も無い譯である。それ故先生は形臨の如きものは三四十代で早くも通過し法帖に對するお悟りを得てから、意臨に轉じ間もなく又法帖碑本を蹴飛して堂々梧竹の一風を興した颯爽たる書藝を見ると、矢張り先生は書道の大天才である事が判るのである。

之に反し貫名は有名な臨書家で臨書と云へば貫名を直ちに聯想する位、終生形臨に没頭し過ぎた爲め形臨の名手と



云ふ名をば嬴得たが同時に奴書として一生を終つて了つたのは誠に氣の毒である。鳴鶴翁や一六居士を初め多くの書家連が貫名を神様扱にして居つた明治四十四年頃、貫名は書家であつて書家ではないと一蹴し去つた梧竹先生の見識は實に卓抜であつたと今更ながら敬服の外はないのである。先生は晩年迄王羲之、王献之のものを多く意臨されてを つたので頗る上達せられ、蒼海湖島種臣伯の如きは先生の十七帖を以て古今の名品なりと絶賞せられ、明治天皇へ奉 献す可しとて、自ら其手續まで世話をせられた位であるが、先生は自から省みて満足するに至らず、恐くは筆の異なる 爲めであらうと考へて、八十歳の時に至り短鋒を用ひて弘法大師の書を臨して見た所、大師は長鋒でなく短鋒なるを 知つて更に短鋒を以て羲之の書を臨摹して見た所、初めて會心の作を得られたので、茲に大に悟る所あり、長鋒を用 ひたのは支那人によつて誤られたりと云うて長鋒から中鋒に移り、短鋒を用ふるに至つて遂に長鋒を廢し、八十歳 から更に發憤努力して一大進境を示すに至つたのは驚歎す可き大事業と云ふ可きであらう。それ故若し梧竹先生の臨 書をと問はれたならば、晩年短鋒を用ひてから最も圓熟の頂峯に在つて意臨せられた、八十五歳の朱處仁帖と省飛白 を推さねばならないのである。而して此二點は先生最後の臨書にして且つ其書品の高雅なる點に於て又能く法帖を藝 術的に生かしてをる事に於て意臨として千古に其範を示した貴重の二幅である事を學者は知つて置かねばならぬ。 然し何故に長鋒を用ひしは支那人に依つて誤られたかの論に至つては稿を改めて他日書界の爲めに卑見を述ぶる考へ である。(終)

書 藝 閑 話

海老塚四郎兵衛



此書藝閑話は、昭和九年三月から昭和十二年七月までの間に來觀せられた方々と、私との間になされた一問一答を順序もなく蒐集したものであります。人の面貌の各異なるが如く、其觀察も亦千差萬別にして、向上の論あり卑近の説あり、珍問あり奇問あり、随つて奇答あり珍答ある所以であります。讀む人自己の見得底に従うて宜しく取捨選擇せられたならば書を鑑賞し、書を學ぶ上に得る所もあらんかと斯くは上梓する事とはなしぬ。

## 書藝閑話

「信州は梧竹先生の先祖が出られた關係上、先生も兩三度漫遊せられて、大に揮毫せられました。長野市の公會堂城山館の貴賓室に掲げてある『藏春閣』と云ふ五間もある大額は、其品致と云ひ、風韻と云ひ、寔に立派な書であると云ふ噂ですが、御覽になりましたか。」

「あの額を書いた時の経緯が面白いので昨年八月觀に參りました所、其筆力の雄大古厚にして書品の高雅なるに驚かされました。先生は支那から歸つた五十七八歳當時は、名實共に日本第一と云はれ大に歓迎せられてをられたのですが、七十歳頃から大に自分の書を書こうと云ふので苦心し初めた所、鳴鶴翁や一六居士をはじめ、其當時の書家は只古人の書を真似るのを以て最上であると思惟する程度の、極めて幼稚な考であつた爲め、先生の苦心が一向に分らず、先生の書は近頃邪道に陥つたと云ふ評判が立つた結果、其名聲一時に墮ちて了つたのであります。それ故、地方では寧ろ鳴鶴翁の方が大家として

名聲が高まつてまゐりました。所が長野市の市長が城山館の額の筆者を選ぶに當つて當時學問のある富豪で、人望の高かつた松本市在の窪田畔夫老人の意見を徴した所、老人は言下に梧竹先生を最適の書家として推薦いたしました。然るに其當時天下に高名な鳴鶴翁を斥けて梧竹先生を推舉した爲め、不思議に考へた市長は改めて其推薦の理由を畔夫老へ訊ねられました。そこで老人は其理由を委しく市長へ説明をしたので、市長も漸く納得し城山館の額は先生に依つて遂に揮毫せらるゝ事になつたものであります。」

「其理由と云ふのを伺ひたいものですな。」

「嘗て、岡本黄石翁の八十の賀筵を江東の中村樓と云ふ有名な料亭で催すに際し、谷干城將軍が發企者の一人に擧げられ、支那の大官連を一夕此料亭に招いて酒宴をやる事になりましたが、其當時の支那は大國として優遇をうけ、公使として黎庶昌と云ふ有名な學者や、大臣級の名士が多く來朝して居つたので、鑑賞眼の高い支那人が見て笑ふ様な書を床にかけては國辱であるとの見地か



ら、鳴鶴翁や一六居士なども其委員の一人に挙げられて  
をつた結果、慎重に協議を重ねた末、支那に於て名聲の  
大に擧つた梧竹先生の書幅を床にかけたのであります。  
然るに下檢分に来られた谷將軍は、先生の書幅を一見す  
るや、かくの如き子供の書いた拙ない書を誰れが掛けた  
るかと激怒され、鳴鶴翁を呼出して叱責せられたので、  
翁は支那の名士が見て賞める日本の書は梧竹以外にない  
と説明をしたので、其まゝ先生の幅は床に掛られたので  
あります。所が先生の六朝文字の幅を見た支那の大官一  
同は口を極めて先生の書を賞め讃へたので、谷將軍も初  
めて先生の書の偉大な事を悟つたと云ふ物語りをした爲  
め、長野の市長も漸く先生に額を依頼する決心が付いた  
と云ふ事でありませぬ。」

「廣重の風景畫や、寫樂の肖像畫を外國人が世界的だ  
と賞めた爲めに廣重や寫樂の浮世繪が日本で有名になつ  
たのと同じ様なお話ですな。日本では専門家が鑑賞眼に  
乏しい爲であると説く方もあります。」

「そう云ふ風に云はれても致し方が無いと思ひます。」

様故其書家の云ふ専門家の鑑賞眼と云ふものが、そもそ  
も疑問ではありますまいか。」

「其書道大家は又、鳴鶴翁と梧竹先生との書の比較論  
を多くの門弟に説いてをられるそうですが、それが奇抜  
で面白いと云ふ評判であります。鳴鶴翁は死ぬまで筆法  
の正しい書をかいて居られたので、初學者が翁の書を習  
つても誤ると云ふ事はないが、梧竹先生の書は初學者が  
習ふと飛んだ誤りを引起すから初學者に取つて鳴鶴翁は  
實に親切な有難い方であると云ふのであります。」

「成程面白い奇抜な論であります。然し初學者が梧竹  
先生の書を習ふには先生の十代から二十代の書を習はね  
ばなりません。此時代の書は初學者に對して親切懇切を  
極めてをるのであります。少し上手になつてそろ／＼支  
那の古法帖でも習ふ様になつた人は、先生三四十代の書  
を習ふと、實に親切懇切を極めてをるのを發見せらるゝ  
であります。法帖も習ひ盡くして其法帖に少しづつ、疑  
問を有つ程度になられた人は、先生五十代の書を習はれ  
ると實に懇切を盡くしたものであると云ふ事を悟るので

此春の展覽會の時、何うも現代の書家の多くは一向書が  
分らぬので困ると話をしてをつた所、其席に居られた浮  
世繪研究の權威で知られた藤懸文學博士が、矢張り日本  
の畫かきは繪が分らぬと云うて笑つてをられました。ま  
さに、好一對ですな。」

「そう云へば、日本の書道會と云ふよりも東方書道會  
の重鎮として知られた書道の大家が、梧竹堂主人は書家  
の賞める梧竹の書をほめないで、専門家の賞めない書を  
ほめてをると評してをらるゝ、そうです。」

「それは現代日本の書道大家らしい説で面白いですな  
其書家は嘗て自分の機關雜誌『書壇』誌上に梧竹先生の  
有名な書論の講義を連載した事があります。其話を聞い  
た梅園方竹氏が、あの書家の書學の力では、あの書論の  
講義は難しくて出來得ない筈である。是非見たいと云ふ  
ので取寄せて見せた所一讀した氏はこう云ふ説明ぶりだ  
はもう一二回で中止するであらうと豫言せられたが其後  
間もなく其講義は中止するに至りました。一流の大家と  
稱せられてをる此書家の書學の力にして既にかう云ふ有

あります。古人一通りの書が手に遣入り、今度は自分の  
書でも書かうかと考へらるゝ、學書者は、先生七十代の書  
を見ると其懇切な事がお分りになると思ひます。更に數  
歩進んで章法と云ふものが如何なるものか學びたい方  
は、先生七十六歳以後の書を見ると、章法がいと町寧  
懇切に示されてをるのであります。愈々書の藝術と云ふ  
ものを知りたいお方は、先生八十五歳の神品を研究せら  
るゝと能くお會得の出來得る様に懇切に書の藝術が示さ  
れてをるのであります。鳴鶴翁の如く一生を通じて只管  
初學者にのみ懇切丁寧であると云ふ事は甚だ奇特の事と  
云はねばなりません。書家はよろしく梧竹先生の如く  
初學者は勿論、各階級の學書者に懇切丁寧である可き事  
を學ばねばならぬと思ひます。」

「本年四月頃自分の機關雜誌に『余技家に俟つ』と云ふ  
論文を掲げた書家がありました。が御覽になりましたか。」

「梧竹は日本で古今の第一人者であると常に推獎して  
居つた紫野大徳寺派の管長宗般禪師は、今一休と呼ばれた  
名僧であります。其法弟である佛畫の名手に就いて繪



を學んでをつた書家がそんな論を書いて此春送つて参りました。此書家は梧竹の書を深く鑑賞した結果、昨今漸く自分の書の甚だ拙ない事や自分の師匠の書も、又現代大家と云はれる人の書も、殆ど藝術的に成つてをらぬと云ふ事を斷然悟つた爲め、書で飯を喰べてをる書家には書の藝術は到底望んでも駄目である、宜しく書で飯を喰べない余技家にこそ、書の藝術は俟つ可きであると云ふ論を發表したのです。

「何故書で飯をたべてをる書家には、書の藝術は望めないのですか。」

「其書家は或時、日本橋の大商店に買物に行つた所、求むる品が一つも無いので不可思議に考へて其理由を尋ねしに、お求めになる様な高級品は年に一つか精々二つ位しか出ませんから、そんな高級品を賣つて居つては商賣にならぬから置かないのであると其店主が答へたので、商賣と云ふものは成程そう云ふものであるかと教へられました。書家も書で飯をたべて居れば矢張り一つの商賣である。此間も弟子の一人が「先生、此先の横町に

もお習字屋さんが一つ殖へましたよ」と教へて呉れた。

成程書家はお習字屋さんに相違はない。弟子を多く取つて飯を喰べるには、千人に一人か二人位しか分らぬ様な高級の藝術書をかいて居つたのでは弟子は來ない。矢張り一般向な誰にも分る俗書をか、ぬと飯が喰へないと云ふのであります。従つて俗書計り書いて居るから藝術的書は、出來ないのであると云ふのが其書家の所論であります。其説の當否は且らく措き、徹底した議論の持主ですな。」

「梧竹先生は日本人の詩は面白くないから書かないと云うてをられたそうですが、實際でせうか。」

「此春の展覽會に本郷の順天堂で生理學の大家として有名であつた田中醫學博士が來觀せられたので、其話をした所、老博士は夫は面白い話であるとして色々の實驗談をせられました。」

「多年澤山の名士に接して來られた博士の事故面白い話をござりませうな。」

「明治三十五年頃、支那の名士であつた劉雲嘉が入院

せられた事があつた。其時代に小野鷲堂の書が非常に流行して居つたので、劉氏の附添看護婦が鷲堂から手本を書いて貰つて劉氏に見せた所、日本ではこんなものを書くと云ふのかと大に笑つた山を看護婦から聞いた老博士は、こは國辱なりとて弘法や逸勢、佐理、行成の書を携へて行つて早速劉氏に見せた所、之は成程立派な書であるとして激賞せられたので此支那人は中々具眼者であると考え、色々の事を訊ねた所、實に立派な學者である事が判りました。或時詩人として有名な廣瀬淡窓の「曉枕秋

意多。肅々拂葉聲。追思夢中句。一字未分明」の詩を示して教を乞うた所、此淡窓と云ふ人は却々の詩人であるな、此詩は杜子美の風格があるとして賞讃し聲をあげて吟じて行つた所、結句に至つても何うしても吟じ得られなかつたので、惜しい哉、この詩は詩になつてをらぬと嘆息せられました。之を見て日本人が漢詩を作る事の甚だ難しいのを悟つたのであります。淡窓の如き近代稀有の大家にして猶ほ斯の如しと云ふに至つては、日本人は漢詩を習ふよりも寧ろ和歌か俳偕をやつた方が完成すると考

へたので、漢詩はそれ以後自分は廢止しました。梧竹先生が支那の有名な古詩のみを書いて日本人の詩を書かないのは確かに卓見であると云はれました。」

「和歌と云へば歌人として有名な山形縣の結城哀草果が仙臺の二高書道部主催の梧竹遺墨展を見て大に敬服し、其感想を雜誌アララギに書いて居つたのを見ました。が御存じですか。」

「雜誌アララギのは見ませんでした。東北帝大の小林淳男氏に寄せられた結城氏の書翰を拜見しましたが、歌人だけに短かい其手紙の中に能く其時の感想を書き現はされてをるのに感心させられました。」

小生は六月七日に第二高等學校の梧竹遺墨展を拜觀致し候。しかして書がかくまで高く大きく到り着きたるを眼のあたりに仰ぎ。心しぼりて驚歎致し候。これ正に梧竹先生の捨身の修業の結果と存じ。暫らく會場の一隅に佇立して眼をつむり申し候。梧竹先生の遺墨より受けたる大なる感銘は小生にとりて生涯的のものとして存じ候。



此手紙を繰り返し読んでをると梧竹先生の大藝術に驚歎のあまり、茫然自失せる結城氏の詩人らしい姿が、眼前に髣髴として見へてまゐります。」

「仙臺の小林氏と山形の結城氏とは、書道上の何か關係がお有りなのでせうか。」

「小林淳男氏は言語學の權威であります、其本職とする言語學の見方と、書の藝術の見方と頗る似通つてをる所から書の觀賞力が卓越して居られるので、梧竹の書の研究に没頭した結果、専門の篆人でも鑑賞の最も至難とされてをる先生の古文や篆を非常に能く理解した鑑賞家の一人であります。烏山の梧竹堂に來觀された多くの鑑賞家の中で先生の古文と篆の分つた人は此小林教授と駒澤大學の荒木正胤氏の二人の様に記憶して居ります。」

「こう云ふ風に先生の書の眞價を知つた氏は、是非か、る書聖の大藝術を仙臺に紹介して書道の向上を計りたいと云ふので二高書道會に關係のあつた教頭鈴木紀一郎氏、小池秋草氏、土井晚翠氏、那須省吾氏を初めとし、栗田豊氏、濱田廉氏など二高の教授連と協力して梧竹遺墨展

を二高の校舎で開催したのであります。それ故二高書道部の主催ではありましたが、其中心的活躍をした人は小林教授であつた關係から來觀せられた結城氏と自然親しい關係を生じた譯であります。此展覽會は全部梧竹堂の藏品でありましたが仙臺始まつて以來の大展覽會であると稱せられ、こう云ふ立派な展覽會は書に關する限り仙臺に於て再び見るを得まいと云ふ評判を獲得したのは全く前記諸氏の献身的努力の賜であります。」

「展覽會が大成功を得られたのは諸氏の献身的努力の賜である事は勿論でありませうが、昔しから先生の書として旅館針久の看板が有名でしたから、梧竹先生の書に對する研究が平素から進んでをつたのも其一因を成したのではありますまいか。」

「何しろ仙臺は學術の都であり、東北帝大には世界的の學者も多く、各方面に卓越した人の勢からぬ所から趣味の高い點に於ても他都に優れて居るかと思ひます。鑑賞家として有名な河北新報社學藝部長の三原良吉氏が、其壯觀に驚いて其紙上に大に梧竹を論じたるのも與つて

力がありますが、東北帝大の阿部次郎博士、近藤正二博士、丸井清泰博士、勝本正晃博士、佐藤升次郎博士、石原謙博士、小山鞆繪博士、山田孝雄博士、熊谷信藏博士、神津假祐博士、高柳眞三博士、岡崎義惠博士、金倉圓照博士、有井癸巳雄博士、佐武安太郎博士などの教授方を初め吉田重三郎醫博、阿刀田二高々長、針生久助氏、神門久太郎氏、三井益治氏、板原瑛夫氏、西嶋榮藏氏の如き各方面の趣味人數百名來觀して鑑賞せられた事は仙臺に於ても容易に見られない會であると云ふ噂でありましたが、其方々の梧竹の書に對する批評を綜合するに相當高き鑑賞眼を有せらるゝと云ふ事が判つたのであります。自己の本業に眞個精通して一家の見を有する人は其力に依つて物事の理解が非常に速いと云ふ事を痛切に教へられました。之に反し自分の本業にも精通せず、見聞が狭く、教養の低い人に藝術を説明する位骨の折れるものは無いのであります。梧竹先生も其當時の低級な書家仲間の質問應答には餘程困つた様であります。それ故先生に書法を問ふ者があると『書法とか筆法など云ふもの

は色々の書物に出てをるからそれを見たらよからう。どの書がよいとか悪いとか云ふ事は人々の好き嫌によるから斷言は出來ないが、技は習熟を要するから澤山習ふにこした事はない。然し私は何も知つてをらぬ』といつも答へてみました。其當時、一流と云れてをつた鳴鶴翁、一六翁の鑑賞眼など、云ふものは我々が見てさへ幼稚極まるものでしたから先生から考へると寧ろ滑稽を感じられたものと想像せらるゝのであります。それ故自分の書は、百年以後自分と同じ位に書のかける人が生れて來ないといふ自分の苦心は分つて貰へないから、眞價は認められまいと常に云うてをられた其先生の書が其歿後僅か二十有余年にして、早くも仙臺に於て澤山の理解者を得たと云ふ事は仙臺のお方が其趣味の甚だ高雅であつた賜であると思ひます。」

「然し、貫名の臨書が素晴らしいと云ふ事を發表したのは鳴鶴翁だと伺つてをりますが。」

「貫名は形臨の名手だと云ふ定評であります、昭和十一年七月泰東書道院の機關雜誌『書道』の古今臨書號



の巻頭に貫名の臨書「孫過庭の千字文」が原本と並べて出しておりますから、それを御覧になると貫名と云ふ人の形臨と云ふものは刻の誤りまでも其ま、可寧に臨してありますが、現代大家の中にも紙の折れた爲めに出来た線を矢張りこくめに臨してをつたと云ふ一笑話もありますから、明治、大正を通じて貫名の臨が書道界で持てはやされたのも無理ではないと思ひますが、具眼者から見ると、全く問題ではないと思ひます。その貫名の臨と並んで梧竹先生の朱處仁帖の臨が原帖と一緒に出て、をりますが、之はまた法帖の誤りをすつかり訂正して立派な章法を以てしかも義之の風韻其ま、を餘白に活して書いてをるのを見ると、此二大家の力量と云ふものは、横綱と前頭ほどの相違のあるのを認めない譯には參らぬのであります。」

「然し『梧竹の臨書に就て』の論文中にお書きになつた松田南溪翁晩年の書評に對しては書道界で相當問題になつたらしいですな。何しろ翁晩年の書が大家の筆として平凡社から出版せられて間もない事ですから無理から

ぬ事ですが。」

「左様です。南溪翁の書評に對しては讀者の中から色々疑問が持上つたと見へ、南溪翁の高弟である梅園方竹氏が書壇新報から頼まれて南溪翁の書評を書いて居ります。一体あゝ云ふ種類の書道雜誌でも見て書を習うてゐる連中と云ふものは、多くは初心者故、私のあの論文は向上過ぎて分らぬのが當り前であります。梅園氏の説明の如く、南溪翁は晩年弘法大師の側筆を大に真似て殆んど側筆のみを以て條幅を書いてをるのであります。之は藝術上から見ると正道ではなく邪道であります。側筆と云ふものは元來線が軽く見へて品位のあるものではありませぬ。それ故王羲之でも弘法でも直筆の中に側筆を少しませて用ひてをります。さうすると直筆が重厚に見へ、輕重相交つて書が引立つのであります。能て云ふと直筆はシテで側筆はツレであります。ツレと云ふものは華やかに軽く諳つてシテ役の諳をして枯淡に見せ、重々しく見せて引立てるのであります。それ故シテ獨りで演ずる能はありますが、ツレ獨りで演ずる能は無いものです。」

梧竹先生は直筆のみを用ひて書いたので能て云ふとシテだけにて舞つた譯です。然るに南溪翁は側筆のみを用ひツレだけにて舞つたと云ふ事は失敗であります。それ故南溪翁晩年の書は輕るぼくなつて眼まぐるしく、重厚味が無くなつたのであります。」

「書を學ぶには良師を選ばねばならぬと能く教へられますが。」

「鳴鶴翁も一六居士も緒遠良を習つた中澤雪城に就いて教をうけた爲め、若い時代には癖のない美麗な書を書いて居つたそうですが、明治十五六年頃潘存の弟子であつた楊子敬が來朝したので、鳴鶴翁は鄭文公の碑を、一六翁は敬之君の碑を楊氏に就いて習つたのであります。然し此楊氏は師潘存に比して書學の力が大に劣つて居つたものと見へ、兩翁とも充分六朝文字を消化して取入れる事が出来得なかつたので、遂にあゝ云ふ程度で終つたのであります。然るに梧竹先生は五十歳の時既に一家をなして居つた所へ、長崎にて余元肩の爲め大に啓發をうけ篆隸なども立派に書きこなして得てから六朝の書道研究

の權威潘存に師事した爲め、六朝文字の取入方が正鵠を得たのであります。日本に於て梧竹以外に六朝文字を書き得ないと云ふの一事を見ても師と云ふもの、如何に大切であるかと云ふ事が分るのであります。」

「信州の書家が梧竹先生の千字文を出版せられ、其推奨文を的傳居士が書いた様に伺ひましたが。」

「其千字文は十冊の法帖に成つて居りまして徳富蘇峯翁が何か書かれたそうですが、先生の書に對しては私の推奨文が必要だと云ふ意見が擡頭した爲め左の様な推奨文を書いたのであります。」

#### 梧竹翁楷書千字文推奨之辭

信濃國東筑摩の、松陽、飯沼一三氏は書聖梧竹翁の楷書千文字を昨秋出版せられ、其第一卷を贈られたので、焚香披見したる所、其墨色と云ひ字の嵌りと云ひ、恰かも翁の眞蹟に接したるが如く、之が印刷せられたる法帖であるかと驚歎したるは、恐くは予獨りではあるまい。寔に理想的複製であると云ふも決して過賞ではあるまいと思ふ。



然し明治の三筆と稱せられた、一六、鳴鶴を始めとし、前田黙鳳、渡邊沙鷗の如きも梧竹先生の篆隸行草をそれ／＼推奨して居られたが、楷書に至つては何人も褒める事の無かつたのは頗る面白いと、佐原隆應上人は評してゐる。

上人は時宗大本山蓮華寺の貫主で、歌人齋藤茂吉博士の書道の師であるが、近來稀なる書の達人で、一六翁や鳴鶴翁よりも遙かに書品の高い立派な書をかいてをられたので、其鑑識眼も斷然卓越し、隠れたる鑑賞家として、關西では有名な人であつたが、梧竹先生の楷書は眞に天下の絶品であると、常に推奨してをられた。寔に千古の卓見と云ふ可きであらう。

此和尚は行草も上手だが楷書が最も得意で、其當時の書家などの到底及ばぬ立派な楷書をかいて居り、楷書では大に骨を折つて苦心した爲め、梧竹翁の楷書の千古に傑出し、珍重す可き事が分つたのである。

夫から梧竹先生の、戈法と云ふものは實に優れたもので、我國では弘法、梧竹の此二人だけが、筆法上一番難

く行涉つて居り、六朝隋唐の書法は固より、秦碑漢碣の研究を遂げてから、更に夏殷周三代の古文までもすつかり書きこなしして手に入れ、而して後に、漸く完成したる書道の大藝術であり、線藝術に於ける最高峰に到達して、線の研究が古今に秀で、居る爲めであると、云ふのが忌憚なき予の意見である。

而して今回、松陽氏が出版せられたる眞書千字文は、書聖梧竹の數多き藝術的作品中に於ても秀逸の部に屬す可き名品であり、推奨するに足る法帖である事を附言しておく。

然し乍ら、かゝる高級な藝術品と云ふものは、畢竟高尚な一部の趣味人か、鑑賞眼の特に卓越せる書家に非ずむば、容易に理解し能はざるもの故、相當な失費と多大の犠牲を覚悟して、奉仕的出版を敢行した、飯沼氏の美舉に對して予は敬意を表する一人である。

昭和丁丑初春

然るに此千字文法帖は日本の一流書家の人々が多く買求めたのは喜ぶ可き現象であり、我書家の進取的進歩的

しい。戈法を書き得て居るのみであると云ふ一事だけでも、先生の書は崇む可きであると云ふ事なども、上人は親しく自ら筆を執つて、大に説明をしてをられたのを記憶してをる、斯の如く予は隆應上人より、卓越非凡な鑑賞的指導を絶えず受けて居つた爲め、書の鑑賞に深き興味を覚え、爾來二十有餘年間宮内省の梅園方竹氏を相手に、書の鑑賞的研究に没頭した結果、近頃先生の篆と楷に無限の魅力を感じて來たのは、確かに鑑賞上の一進歩であると自から信じて居るのであるが、元來楷書と云ふものは兎角堅く成りがちの爲め、上品にして品格の高い楷書は、支那に於ても日本に於ても少くは無いが、酒脱にして風韻に富んだ楷書と云ふものは、支那に於ても容易に見出す事が困難なものである。然るに梧竹先生の楷書に至つては、立派な品格と酒脱な風韻とを兼ね備へて居るの點では、眞に古今獨歩であると云ふも決して溢美の言ではないと思ふ。

一體、梧竹先生の篆や楷が古今に秀で、をると云ふのは先生の研究と云ふものが古への書聖に比して、深く博

なものには敬服せざるを得ないのであります。然しあの千字文を仔細に見ますと篆隸を充分書きこなし得ぬ書家では臨摹しても到底物にはならぬ事と考へてをります。先日上野の大日本書藝展にて鳴鶴翁の篆と云ふものを見せられましたがあ、云ふお粗末千萬なものも大家の篆だなど、云うて見せるは何うかと思ひます。日本の書家が篆の研究を疎にして居る結果、篆に對する眼がない爲め、線に面白味が出て來ないと評する人もあるのは一考す可き點だと思ひます。梧竹の千字文をお習になつた書家は此點大に會得せらるゝ事と考へてゐますが、十七帖や蘭亭をいゝ加減に臨摹して、羲之の書の眞を得た様に考へてゐる書家の例を隨所に見せられて居る私は、果して如何程の所得をあれに依つて得られるかと心配してをりますがあの千字文を習つて成る程之は難しいなと悟らるゝ人あらば其人は寔に頼もしき向上底の人であると思ひます。

「一六翁は維新の功臣三條實美公や、伊藤博文公などの依頼をうけ、梧竹先生を其邸へ案内する時には其手紙



の中に必ず例の長鋒を御持参ある様書添へてあるのは面白いと思ひます。」

「其長鋒とあるのは羊毛の軟かい餘の鬚の様に頗るの長鋒であります。先生が其筆に充分墨を含ませて書くとあのぐにや／＼した長鋒が一本の針金の様になつて自由自在になつたそうです。それ故剛なる事蹟のやうな線の中に云ふ可らざる潤ひと柔らか味が含まれて居りますが、一代の巨匠と謳はれた鳴鶴、一六兩翁も此長鋒計りは自由に使へず文字が書けなかつたものでありますから、其長鋒を大官連にも試みさせて先生の靈腕を知らしめたものであります。」

「尤もそう云ふ事でもやつて見せない、其當時の大官と雖もあの高古な先生の書の味は到底分りますまいと存じます。」

「現代の如く書道全盛の時代に於てさへ、高古な先生の書の味は容易に分つて呉れませんからな。」

「然し専門家の説に依りますと、梧竹先生の時代よりも現在の方が書の研究が進歩した様に云うて居ります

が。」

「長足な進歩を來たしたのは事實で有ります。殊に展覽會向な大幅ものの揮毫は實に巧妙になつたと思ひます。其書品の高下は且らく措いてあの大きな紙に見られる様字が書けると云ふだけでも偉いと思ひます。只一般の研究方法は向上進歩して來たが名手が無くなつたと云ふ譯ですな。」

「梧竹先生存生中現れなかつたものが、先生歿後大に土中などから現れたから先生の研究は未到であると云ふ説を能く耳に致しますが實際でせうか。」

「梧竹先生は三代銅器の銘や獸骨文を初めとして各時代の碑碣法帖は盡く見られてをりますし、書道上必要なものは殆んど眼を通してをります。其點我書道上寔に幸福な事であると云はねばなりません。其後前漢時代の肉筆の木簡など出土してはをりますが、之は書の歴史上必要なものでありまして、書道の上にはそれ程重要なものではないのであります。あ、云ふものが出現したので、先生の書の研究が正しかつたと云ふ證明には寧ろなつた

でせうがね。」

「松田南溪翁などは其肉筆の木簡を大に臨摹したと伺つて居りますが。」

「一休あの木簡其ものは其時代の名手の書いたものではないのでありまして、多くは役人どもの書いた物であります。あ、云ふ書として能くない物を臨して骨を折る位ならば、あの時代の名碑を大に臨した方が寧ろ有益であります。」

「日本には書の藝術的なものは梧竹の書以外には存在しないと云ふ事をとく人が有りますが眞實でせうか。」

「夫は却々卓見であります。廣瀬淡窓の書の如きも立派な詩人としての風格があり、結構なものであります。床にかけておいて邪魔にならぬ程度のものであります。石川丈山が立派な學問底を有する爲め、隸書風な姿の悪い文字を書いても兎に角見られるのは偉いが、矢張り邪魔にならぬ程度のものであります。徂徠や副島蒼海の書は學者としての風格が現れて居ると云ふだけで藝術的なものではありません。」

「東郷元帥晩年の書や、乃木將軍の書は謹直崇高の人格が現れて居り、歴史的に尊ばる可きものでありまして藝術的ではないのであります。弘法大師の風信帖の如きも晋唐人の筆の跡を偲ぶにはよいものであります。後半に至ると大師の筆とは思へぬ位、不出來のもので藝術的のものではありません。古今評判の高い風信帖も梧竹晩年の書を深く研究した人は何れも私と同じ感想を抱かせるのは寔に學者の研究を要する事柄であります。空海の灌頂記の如きも名筆の人が無難作に書いたので面白く見られると云ふ程度のもので、矢張藝術的のものではないのであります。あの時代の人は皆盛んに晋唐人の書を習つた爲めに皆あ、云ふ風格の書をかいて居ります。然るに梧竹先生の書になると三百幅が三百幅とも詩の内容に依つて文字の姿から表現一切が異なるため、一幅として同じものと云ふものはない。そうして仔細に見ると初の一行は前の方に飛出してをり、二行目は全く反對に奥の方に引込んでをり、三行目は又前方に飛出して居ります。一字の中でも或一線は奥の方に或一線は前の方に飛



出してをるので遠近高低起伏が自然に備はり立派な山水に接する様な感があるのであります。かう云ふ藝術的の書と云ふものは支那の書幅にも見られない、梧竹獨特の藝術的書と云ふ事が出来ると思ひます。天照皇太神の神幅となりますとは又象徴的藝術の極致と云ふ可きものであります。審美書院から書の名品撮影を常に頼まれて斯道の名人と稱せられる長谷川清七郎氏はもう十年近く烏山の梧竹堂に來觀せられて居りますが、流石に名人だけあつて云ふ事が卓越非凡であります。先生のあの十間のいろはの巻物なら五ヶ年も見て居れば撮れる自信はあるが、あの天照皇太神の幅だけは絶対に撮影が出来ないと云うて驚歎して居ります。拜觀する度毎に其書の姿が異つて見へ捕捉する事が出来得ないので困ると云ふのであります。此一事を以てしても如何に先生の書藝が神技であるかと云ふ事が分ると思ひます。夫から廣業畫伯の門下で多年京都や奈良に遊んで飛鳥、奈良、平安時代の佛像を深く研究した結果、鑑賞眼が素晴しく開いて了つた爲め、畫家を廢業した小林滋三郎氏は眼が肥えて居るの

で畫を見ても書を見ても氣に入るものが少いので有名であります。先生の此天照皇太神には餘程敬服したと見へて云はるゝには、畫では全く表現の出來てをるものゝない天照皇太神が書に依つて、かくも完全に立派に表現せられて居るのは只々驚歎するの他はない。先生は此一幅を書くため此世に生れて來た様なもので、海老塚氏は此一幅のお守りをする爲めに生れて來た様なものであると評してゐました。」

「現代の書家には梧竹先生の草書をほめる人は多いが、先生の篆隸のよさの分る人の少ないと云ふのは書の研究の未熟な爲めであります。一六翁は流石一代の巨匠だけあつて先生の篆隸を推稱してをるのは偉いですが。默風道人に至ては、自分も一寸見られる篆を書くだけに口を極めて先生の篆隸を推賞し、梧竹は篆隸第一とまで絶賞してゐます。」

肅啓益、御安泰奉賀候 陳者今般友人中林梧竹翁伊勢參宮之次暫時游歴之心得に有之候 此人清國に久々留學書法頗妙也 北京大家潘穉初先生の門に入り金石の

學に尤も精し 書法六朝以上に溯り篆隸特に秀偉、御

交遊好事家へ御周旋被下度候 決して貪る人には無之

候へども専門家なれば多少收獲有之様御盡力被下度

候 委曲者從本人可申入候也 頓首

四月十三日

巖 谷 修

龜 井 詞 宗 様 侍 史

「梧竹先生の篆隸や、古文は其當時の専門家から大に認められたものであります。額など書く場合には先生の様に小篆の中に古文を交へてはいけないと云ふ説が或一部に唱へられてをりますが、果して正しい観方でせうか。」

「先生の書には古文と小篆などを交へて書かれたものは未だ見當りませんが、よしんばさう云ふものが有るといたしても古文とか小篆とか隸などを歴史的學問的に説明する場合に於ては混用せぬ方がよいと思ひますが、藝術になると少しもそれは差支ないのであります。曹子建の碑の如きは篆隸楷を交へて堂々書いて居るのであります。顔真卿の如きは篆の筆法を以て羲之の書をかいてを

ります。」

「梧竹先生は漢の楊淮表紀を全部篆の筆法で臨してをりますが、原帖よりは書品が高く餘白に出来て來てをるものは漢代よりも古い商周の古調であります。一体漢時代の書は表面に剛強の氣風が見へるので、品致の點に於て晋代に下るのであります。それ故篆の藏鋒をのみ用ひて表面に剛強の氣の出るのを防いだものであります。かう云ふものも歴史的参考品としては誤りでありませうが、藝術品としては却て面白いのであります。」

「書道漫談中に禪を藝術的に論じたのを讀んだ一禪僧が大に憤慨をして居つたと伺ひましたが。」

「その禪僧はまだ法見、道見に捉れてをる未熟者であります。法とか道とか云へばよいものを術など、云ふのは怪しからぬと云ふのであります。心と云ふものを意馬心猿と云ひ、覺者が其心を自から御するのを馬術にたとへて佛をば調御丈夫と呼んでをるのを知らぬからであります。禪を藝術的に見たのが怪しからぬならば、佛陀を馬を巧妙に御する御者に譬へて調御丈夫則ち調馬師など



「呼ぶのは猶ほ更性しからぬのではありますまいか。然し佛教の教と云ふものはそんな小さなものでないと云ふ事を御互に知らねばなりません。私が明治三十九年騎兵隊に入營する時、釋宗演老師が一詩を贈られました。

入時有孝出時忠。 行動不離兩字中。

禪術養成丈夫膽。 又投軍國學英雄。

送海老塚的傳居士入軍營

洪 岳 宗 演 □ □

右の詩の中にも禪術と書いてありますが、古く術は法とも讀んだ様に記憶してをります。

「先頃國學院大學の一教授が、地上の神である天照皇太神を天上の神であると論じたのが、端なくも重大な問題となり、皇典研究所長の徳川國顯侯は責任を感じて所長の職を辭されたそうですが御存じですか。」

「新聞紙上で承知いたしました。地上の神を天上の神とするのは我皇室と國土との關係上重大な事柄であります。斯の如く我國家やお皇室に對して重大な關係のある、天照皇大神に對し、梧竹の書が不敬であると云ふ事は梧

竹に取つては重大問題であります。辯せんと欲して辯ずる能はざる地下の梧竹に對し義憤を感じて執筆したものが「梧竹の解剖を讀みて」の一文であります。學者たるものが事の輕重を辨へず、亂りに論を發表する事の如何に危險であるかを知る可きであります。」

「昔し文部大臣森有禮は非常な敬神家であり、英才であり、今日まで生存せられてをつたなら元老となつた位惜しい人物でありましたが、洋杖で伊勢太廟の御簾を掲げたと云ふ無根の宣傳の爲め憂國の志士に殺されて了ひました。かゝる英傑を徒らに失ふのは悲しむ可き國家の一大損失であります。梧竹先生のあの神幅が不謹慎な學者の妄論に誤られて毀損せられたならば日本の國寶的名筆を永久に失うて悔を千載に残すものであります。それがあの一文に依つて國家の大損害を未然に防ぎ得たのは我書道界の爲め慶賀す可き事ではありますまいか。」

「其國寶的名筆であると云れてをる先生の天照皇太神の幅に對して書家の間にも色々議論がある様に伺つてをります。」

「書家と云うても澤山の段階がありまして、梅園氏や榊原鐵硯氏の如く鑑賞眼の非常に勝れた人もあるし、立派な肩書のある先生でも一向眼のない人も多いのであります。寧ろ餘り高名でない人の中に素晴らしい眼識を備へたのがある事を知らねばなりません。然し日本の書家は一般に技巧的な見方をするものが多く精神的な觀方の出來得る人の少ないのは困つた事でありまして。天照皇太神の太の點を中央に打たずに左の方に打つたのは間違つてをるとか、神の點を上の方に離して打つたのが悪いとか云ふ風に書と云ふものは一定の寸法に嵌つた型がある様に考へてゐるらしく、鑑賞眼の低い書家の話を聞いてをると滑稽極まるものであります。こんな見方の書家が何百人來ても到底あの立派なお神格を拜する事は出來得ないのであります。つまり多くの書家の研究と云ふものは點畫筆法の末技にのみ止つて藝術的觀賞の研究が出來てをらぬ爲めであります。それ故、日本の書道界の向上を計るには、此藝術的鑑賞の研究を大に興さねば駄目でありませぬ。」

「其お説は尤な事でありませぬ。日本の様によい物と云へば大抵は刻の誤りの多い死物の法帖、碑本でありまして、平素肉筆の藝術的名品に接する機會の少ないと云ふ事も確かに其鑑賞眼の向上しない原因であると思ひませぬ。其點に於て名品と云ふものが多く富豪の倉庫深く秘められて容易に見る事の出來得ないのは甚だ遺憾であります。」

「それは實際であります。學書者の眼識を高めるには日本支那の肉筆の名品を常に安易に觀賞し得る書の國立美術館の設立を私は最も必要とする一人であります。」

「其點に於て不折畫伯の書道博物館は書道界の爲め偉大な功績をして居るのは見上げたものであります。兎に角あれだけの品を揃へると云ふ事は大變な仕事であると敬服いたしました。書道に携はる人は是非度々見ねばならぬものであります。」

「然しあゝ云ふ立派な優れた參考品に平素圍繞せられつ、研究に没頭する不折畫伯の六朝文字と自から稱して居るものが最近頗る一般から不評判なのは何故でありませぬ。」



せう。」

「それは頗る難しいお訊ねであります。と同時に有益なお問であります。嘗て不折と井土靈山と共譯せられた六朝書道論を読むと不折書伯は書は無法より無法に歸するものだといふ意味のことを記してをられたやうに記憶して居りますが、梧竹先生は有法より無法に歸すると明瞭に説いて居ります。何れは双方とも無法に歸するのであります。つまり此見解の相違が梧竹先生の六朝文字となり、不折書伯の六朝文字となつて現れたのではありますまいか。」

「有法と無法との見解の相違は何處より起つたものでありませう。學者の爲め御説明を願ひたいものです。」

「梧竹先生の時代には良い法帖、碑本が容易に今日の様に手に這入らなかつた爲め先生は生きた肉筆に就て大に運筆法を研究したのであります。其決果、筆と云ふものを扱ふには筆を扱ふのに扱ひよい法則に隨ふのが便利である事を悟つたのであります。不折書伯は恐くは死物

の法帖、碑本を最初から大に研究した結果、無法なるを悟つたものであらうと思ひます。」

「大變よい教訓を得ました。梧竹先生が肉筆を大に研究した爲め運筆の上に、大悟を得、大自在を体得してをるので、先生の書を見てをると、多くの書家の書のやうに筆が悲鳴をあげてゐる様が見へず、筆自身が悦んで如何にも愉快氣に走つてゐるのが見へるのであります。それ故先生は書き初めると中途で筆を調へると云ふ事は絶対にないと思ひます。」

「筆と云ふものを自由自在に、少しの無理もなく實に能く美事に使ひこなして居るの點では古今を通じて梧竹が第一であります。此素晴らしい運筆上の智識に依つて碑碣法帖の刻の誤謬などを容易に發見し得た爲めに、貫名がやつたやうなあんな愚劣な形臨をやり得なかつたのであります。此圓融無礙な古今に卓越した筆の扱方が要するに、羲之、弘法も企て及ばぬあの<sup>大</sup>藝術を完成し得た一因でもありませう。」

「然しあなたの『書、鑑賞』と云ふ論文を讀みますと

王羲之、王献之、弘法、梧竹の此四人は共に同一線上に立つてゐる名手であると論じてある様に覺へてをります。が。」

「釋迦に五時八教のある様に、指導的な論と云ふものは其論を讀む其時代の書家の頭の程度を考へて、論を立てないと勞して効のないものであります。然し今日は書聖梧竹に對する書道界一般の認識が向上して來ましたから愈々本格的な議論を發表してもよい時代になつたのであります。然し私の此見方が正しいか否かを検討せんと欲する學者は梧竹晩年の傑作を深く研究する必要のある事を附け加へて置きます。」

「お説明に依りまして、現代の書家の多くが十七帖や蘭亭の滑稽な臨書を雑誌などへ掲載して得々たるのは皆運筆上のお悟りを得ず筆を自由に扱へぬ力量底を以て只單に碑碣法帖の形骸を臨摹する爲めである事を悟りました。」

「それ故あの書道博物館の参考品も運筆上に立派な知識を得てから眺めると非常に有益で面白いものであります。」

す。書を習ふのにも順序方法のある事を知らねば折角立派な参考品も瓦礫となり了るものであります。」

「然し書道博物館の顔真卿の告身帖は眞物でせうか。」

「寫眞で見ると惜しい哉、眞物ではないと思ひます。若しあ、云ふものが眞筆と云ふ事ならば顔真卿の書と云ふものは實につまらぬものであります。あの博物館で見ると可きものは古錢や鐘鼎彝器。碑碣法帖の類であらうと思ひます。漢瓦の類には實に面白いものがあり、何處見ても結構なものであります。」

「いつもあなたの書評の中に使れる書の名人と達人と上手の區別を伺ひたいものです。」

「昔し歌舞伎の破壊者と云れた九代目團十郎が歌舞伎座の忠臣蔵で大星由良之助に扮し後室頼世御前の所へ暇乞に行つた時、一時間以上もある長帳場を看客の方に存を向けて平伏したま、芝居をして看客を泣かせました。所が先年江戸城明渡しの際を見に行つた折には、大西郷と勝安房に扮した現代一流の役者が看客の方に頰をむけて相對座して芝居をしましたが、二十分もやるとだれて



つて見るに堪へなかつたのを覺へてゐます。こう云ふのは名人と上手の相違と云ふ可きであります。」

「かゝる名人を歌舞伎の破壊者と云ふのは何う云ふ譯であります。」

「團十郎の様に、一時間以上も看客に脊を向けてやる様な芝居と云ふものは名人團十郎が演じてこそ初めて芝居になるのであつて、他の役者が演つたのでは芝居にならない。多くの役者が演つても歌舞伎にならない脚本を澤山作らせて後世に残す團十郎こそ歌舞伎の破壊者だと云ふのです。若しも己れの力量を知らない歌舞伎役者が、其脚本をやる場合必ず失敗して歌舞伎の名聲を落し歌舞伎を破壊に導くからであります。」

「九代目團十郎の地震加藤は、初日から樂の日まで二十數回同じ舞臺を見通しましたが、毎日其よい所が違つて居り、倦きると云ふ事が有りませんでした。殊に敬服したのは大向の拍手喝采した所は翌日すつかりやり方を變へてをる事であります。大向の喝采するのは藝の力が表面に現れるから面白くないのであります。名人がか

ゝる苦心をした藝術品ゆゑ、天下一品と稱せられ、九代目當り藝の一つであります。そうして團十郎が舞臺に立つのを見ると全く加藤清正其人が、正しく此世に出現した如く、清正と云ふ人は實に立派な忠義な偉い人物であるなど感心しました。之が吉右衛門の地震加藤になると、此人却々上手に清正をやつてをるなと云ふ感がするのであります。一寸息をぬくとすぐ吉右衛門が出て来るのは困りますが、これは名人と達人の差であらうと思ひます。弘法、王羲之、梧竹は名人であり、顔真卿、虞世南、褚河南は達人であります。子昂、文徵明、董其昌の如きに至つては所謂上手と云ふ可きでありますか。」(終)

昭和十二年九月二十日印刷  
昭和十二年九月二十五日發行 (定價參拾錢)

編輯兼 海老塚 四郎 兵衛

發行者 東京市澁谷區代々木富ヶ谷町一五七〇

印刷人 伊 藤 林 造

東京市澁谷區代々木富ヶ谷町一五七〇

印刷所 文化商會印刷所

東京市世田谷區烏山町七〇五梧竹堂

發行所 中林梧竹翁遺墨展覽後援會

京王電車千歳烏山驛南一丁半

電話千歳烏山二十五番



終

6  
0